

環境に負荷をかけていない素材か

再生繊維を活用し、 綿やリネンは有機栽培を選ぶ

ポリエステルやナイロン、アクリルなどの化学繊維はプラスチックからできています。石油資源を原料にしているため、製造時や焼却処分時にCO₂を排出します。さらには、日常的な洗濯でマイクロプラスチックファイバーが海へ流入することで、海の生物やそれを食べる人間への影響が心配されています。一方で、天然素材も地球に優しいものとは言い切れず、例えば、綿花栽培の殺虫剤使用量は全世界で使われる量の4分の1を占めている現状があります。

サステナビリティを考えるアパレルメーカーでは、ペットボトルをリサイクルした再生繊維や植物由来のポリエステル、オーガニックコットン、オーガニックリネンなどを服の素材に選び、環境負荷の軽減に努めています。



ペットボトルをリサイクルした糸。この糸から軽量のパンプスがつくられる(P9~参照)

プラスチック繊維の服を洗濯する時、目の細かい専用の洗濯ネットを使うと、マイクロプラスチックファイバーの流失を防ぐことができます。

ファッションは持続可能にできる！

絶えず新しいメッセージを発信し続けることが存在価値とも言えるファッションは、宿命的にサステナビリティと相反する性格を抱えていました。

しかし、時代は転換期。多くのアパレルメーカーが地球環境や人権といった社会課題と向き合うようになり、そのアクションをブランドメッセージとしています。

サステナブルファッションのセンシティブな感性、確固たる理念、具体的なアクションは、すべての人にとって、これからのライフスタイルの指針となるでしょう。



廃棄リンゴ由来の原料とポリウレタン樹脂を合成したLOVST TOKYOの「アップルレザー・バイソン柄ウォレット」(写真提供：ラヴィストトーキョー株式会社)

動物を苦しめていないか

リンゴでもキノコでもサボテンでも「レザー」をつくることができる

動物保護もサステナブルファッションの要素の一つ。本革の製品を使用しないよう、合成皮革や人工皮革といったヴィーガンレザー(動物性ではないレザー)に切り替えるブランドも増えてきました。最近、リンゴやキノコ、サボテンなどの植物性樹脂を主原料にした新しいヴィーガンレザーも登場しています。従来の合皮に比べ、石油資源の使用を抑えているところもサステナブルです。

私たちに身近な素材のウールも、羊の飼育の仕方によっては課題があり、病気予防の名目で「ミュールジング」という臀部の皮膚を切除する処理を行う産地もあります。動物愛護の立場から全面禁止に動いた国もあり、「ノンミュールジングウール」として流通しています。

国連が採択したSDGsの17の目標のうち、その1「貧困をなくそう」、その4「質の高い教育をみんなに」はフェアトレードの理念と重なります。



国際労働機関(ILO)などの調査によると、インドでは綿産業で約40万人の児童が働いていると言われています

Tシャツや下着、デニムなどの原料として私たちの生活に密着している綿。残念なことに、世界最大の産地インドでは、多くの生産者が不当に安い賃金で長時間労働を強いられています。親世代の収入が少ないことで、幼い子どもたちも綿花にかかわる仕事に駆り出されていることは深刻な問題です。学習適齢期に学校へ行けないため、貧困の連鎖が断ち切れないのです。

こうした問題の解消をめざすのが「フェアトレード(公正な貿易)」。この理念をもとに活動しているNPOによって、生産者が正当な賃金を得られるような価格で取引する仕組みがつけられています。児童労働を減らすだけでなく、価格競争から離れたところで生産できるため、原料の質も向上するとも言われています。

働く人を不幸にしないか
まずは正当な賃金を払うこと、
そして児童労働をなくすこと

環境に配慮して製造・供給を行っているか

受注生産、再生可能エネルギーの活用、環境に優しいづくり方はいくつもある

環境負荷は原料の生産だけでなく、服や靴の製造から輸送、販売まで、あらゆる場面で発生します。それを一つひとつ点検していくことで、アパレルメーカーは「持続可能性」を向上させることができます。

例えば、受注による少量生産。これは最もシンプルで効果的な環境負荷を減らす方法です。そのほか、再生可能エネルギー(太陽光発電など)の活用、汚染物質の排出削減、水の再利用、輸送重量・距離のコンパクト化によるCO₂排出量削減など枚挙にいとまがありません。最近では、裁断の端材をいっさい出さない服づくりや廃棄衣料の再製品化がサステナブルファッションの新しいトレンドになっています。



2014年からカスタムオーダーでビジネスウェアを提供しているFABRIC TOKYO。店舗でサイズ測定した後はネットで注文できる手軽さで、幅広い世代に好評



「自社製品をごみ処理場に送らない」をスローガンにリペアサービスを積極的に行うパタゴニア(© 2023 Patagonia, Inc)

大量生産、大量廃棄が大きな問題である以上、アパレルメーカーの「持続可能性」は、自社製品を着る人の生活にまで及びます。これからのファッション業界は、1着でも多くの服を買ってもらおうという資本主義の法則から離れ、1日でも長く着てもらえることを考えた服づくりにシフトしていく必要があるでしょう。

初めから製品を丈夫につくること。破れたり、破損したりしても、修繕して使い続けられる服や靴であること。そして、それをブランドメッセージとして、ユーザーにしっかり伝えることが大切です。実際、リペアサービスやリサイクルシステムの充実を図ったメーカーの中には、そのアクション前よりユーザー数が増えた事例があります。

長く愛用できる商品か
初めから丈夫につくり、
リペアサービスにも積極的に取り組む

ロンドンでは、買った古着のサイズを直したい人と仕立て屋さんをマッチングしてくれる「Sojo」というアプリが人気。しかも自転車で取りに来てくれるというサステナぶり。

1. 素材や生産ルート、製造方法に関心を持つ

商品タグや表示ラベルを確認したり、QRコードからアクセスしたりして商品情報を調べます。一人ひとりが関心を持つことで、ファッション業界に情報公開を促すことができます。

2. 衝動買いをしない

買う前にクローゼットの中身を思い出して、本当に必要なアイテムかを考えます。一度や二度ではなく、何度も着るような服かどうか。

3. 長く着られる品質のものを選ぶ

多少価格は高めでも、良い品質のものを選ぶ方が飽きずに長く付き合えます。その際、流行に左右されないデザインを選ぶこともポイントです。

4. オーダーメイド(少量生産)の服を選ぶ

大量生産の潮流に少しでも対抗するには、少量生産のアパレルメーカーを支持すること。最近ではオーダーメイドでも、リーズナブルな価格で提供するブランドが増えてきました。

5. ごみとして廃棄せずにリユースやリサイクルに出す

自分が着なくなった服は「ごみ」ではなく「資源」と考えます。リユースのアプリを活用するほか、自治体や企業が設けている古着回収の窓口に出すようにします。

6. 素材に合った洗濯方法やケアを行う

服や靴と長く付き合うには、日ごろから大切にしたいもの。洗濯タグを見て素材に合った洗い方をする、あるいは靴の手入れを怠らないこともサステナブルのうちです。

7. 破れても修繕して着る

靴底のリペアが当然であるように、服が破れてもリペアして着続けることができるはず。同じアイテムを買うにしても、リペアサービスを行っているブランドを選びたいものです。

着る人にできる
サステナビリティ



情報の透明性を保証しているか

企業としての本気度を示そうとすること、それ自体がサステナブルと言える

「グリーンウォッシュ」という言葉があります。「環境」を意味するgreenと「上辺だけのごまかし」という意味のwhitewashが合体した造語ですが、「持続可能性」をうたう企業活動の内容が薄い時、「グリーンウォッシュ企業」と評されます。

サステナビリティに関して本気度の高いアパレルメーカーは、原料の調達先、製造方法、社員の働き方などの情報を公開し、ビジネス自体が環境や社会に貢献していることを表明しています。“社会を良くする会社”のための国際的な認証制度「B Corp(ビーコープ)」の厳しい審査を受け、その認証を得ているアパレルメーカーもあり、こうしたアクションそのものが、社会にインパクトを与える点でサステナブルであると言えます。



B Corp認証を取得した企業の取り組みを総覧できる『B Corpハンドブック——よいビジネスの計測・実践・改善』(バリューブックス・パブリッシング)